

## 現地人との交流の重要性

B 班 筑波大学 安藤 涼夏

今回の訪中団を志望した理由として、今まで色々な人から話を聞いてきた中国を自分の目で見たかったということがあげられる。

これに関して、私の父方と母方の祖母はどちらも中国との関係が深く小さなころから色々な話を聞いてきた。父方の祖母は満州国で生まれたため幼少期の頃を中国で過ごしたようだ。一方、母方の祖母は太極拳をしていたため、毎年中国に行っていた。この2人からの話を聞いていたため、中国は私の中ではそれほど心理的に遠い印象はなかった。しかし、戦時中の記憶が強いためか、中国に対してのマイナスイメージを少なからず含むような話を聞くことも何回かあった。そのためこの訪中団に参加すれば中国の今の姿を知ることが出来るのではないかと思い参加した。実際に参加してみると想像以上に日本に対して興味を持っている中国人が多いことを知った。山東大学で出会った学生は日本語学科であるため、日本に興味があるのは特に驚きはなかった。しかし、青島の街を歩いているときに出会った地元の中学生と話したときに、その子も日本が大好きと言っていたことに一番驚いた。大学生でも今回の研修に関わりもない、青島に住む普通の中学生だったからだ。たまたま近くにいたので青島について聞こうと思い、その子に話しかけたところ、日本のアニメや映画が好きだということで、非常に話が盛り上がった。今まで、欧米や東南アジアの人が日本の文化が好きということに対しては何の疑問もなかったが、無意識のうちに中国と日本はそういったメディア文化の交流はないものだという偏見を持っていたことにも気が付いた。この出来事を通して、日本のコンテンツは中国でも強い影響力を持っているのだと実感し、私が考える以上にアニメや漫画などが日中友好に大きな役目を果たすと感じた。

これとは別に、イメージ通りだったことは、一部の中国人の凶々しい感じが生で見られたことだ。これは中国人だからというより日本人が礼儀正しいだけなのかもしれないが、列に並んでいたら本当に割り込んで入ってこようとする人（大体年配の女性）がいたり、道路ではクラクションを何度も鳴らし先へ進もうとする車がいたり、私が先入観として持っていた中国のイメージが本当にそこにはあった。ただ、頻繁にあるわけではないので、私が持っていたイメージが絶対というわけではなかったが、間違いでもなかったということを知ることが出来たのは非常に興味深かった。

私たちが日本人だから、反日感情などを持った人と会うことは全くなかったが、今後はそういった人たちの話も聞いてみたいと思った。今回は日本が比較的好きな、若者としか関わってこなかったのも、ただ単に「中国は最初の印象よりは格段に良い国だった」というような印象しか残らなかった。本当に必要なのは、メディアが煽るような反日感情が実

際はどのような感じなのかということを知ることだと思う。従って、次回訪中することがあれば、日中の戦争の歴史などを学べるような場所に行きたい。

最後になりますが、このような素晴らしい経験を提供して下さった日中友好協会の皆様、山東省の関係者の方々、バスガイドのお二方を始めとする本研修にご尽力して下さったすべての皆様に感謝いたします。ここで得た知見は、一生の財産です。これからも中国に留まらず、様々な国、地域を訪れて新たな価値観を得続けたいと思います。ありがとうございました。

## 共存の未来

B班 慶応義塾大学 岩瀬 真

私は今回の訪中団で大きく分けて三つのことが印象に残っています。

まず一つ目は、中国山東省の伝統文化や歴史です。山東大学の博物館で実際に科挙の一人目の合格者の答案用紙を見たり、昔使われていた楽器を実際に使ってみたりしました。また、曲阜師範大学では漢服のショーを見たり、実際に自分が着たりしました。漢服はとてもきれいでしたし、楽器の音色は聞いたことのない音ですが心地よかったです。実際に自分の目で見たり自分がやってみたりするという体験を通して中国の伝統文化に触れることができました。日本にも様々な伝統文化がありますが、中国にも素晴らしい伝統文化があると感じました。

私は、案内してくれたガイドさんや山東大学の学生さんの知識の量に驚きました。歴史について深く広く知識を持っており、案内してくださる間ずっと話続けられる知識量に、日々興味を持って熱心に勉強されているのだと感動しました。

そして二つ目は、中国の先端技術です。ハイセンスの本社見学や、青島自動化埠頭の見学を通して中国の先端技術に触れることができました。ハイセンスでは日本では見たことのないような家電同士の連携やきれいなディスプレイを見学しました。また青島自動化埠頭では自動化された無人のコンビナートを見学しました。どちらもかなり進んだ IOT であると感じ驚きました。特に埠頭のシステムはぜひ日本にも取り入れてほしいと感じました。

私は、中国の環境に対する意識に驚きました。訪中以前は中国が環境問題に対して積極的に取り組んでいるイメージはありませんでした。しかし、どちらの企業もかなり環境を意識しており、太陽光発電や水素エネルギーの積極的な利用に関心を持っていることを知って、中国も環境問題に対して動き出しているということを知りました。

三つ目は、現地学生との交流会や、訪中を通じた運営の方々の仕事から、集団の良さを感じたことです。交流会で披露された太極拳や楽器のパフォーマンスはとてもかっこよく見ごたえのあるものでした。また、ガイドさんや学生の一部の方が宴会や見学中の通訳をしてくださいました。これらの方の協力がなければ今回の訪中団はこんなにも学びのあり楽しい有意義なものにはならなかったでしょう。

私自身勉強が得意なのですがそれは今回の訪中団ではなんの役にも立ちませんでした。披露することもできないし、中国の歴史には無知であり、中国語も堪能なわけではありません。でもそれでよく、大事なことはチームとしてなにができるかであると感じました。太極拳が得意な人はもしかしたら中国語が話せないかもしれないし、通訳の人は楽器が演奏できないかもしれない。ただ、各々が自分の得意な分野で力を発揮することで今回のような素晴らしい訪中が実現しました。

私はここから一つのことを学びました。それは大人数でそれぞれが得意な事をやる事で全

体のレベルは向上するという事です。自分が10の力を使ってやることを隣の人は1の力ででき、隣の人が10の力を使ってやることを自分は1の力でできる場合、ふたりで得意な事を行えば、少ない力でより大きな成果を出すことができます。それぞれの人が価値を発揮できる場所で輝くことで全体のパフォーマンスは向上していくのです。そして、巻き込む人数が多いほどできることは加速度的に増加します。

ここから一つのことを考えました。それは、国同士の関係においても同様の事が言えるということです。ある国では工業が栄えていたり、ある国では資源が豊富にあったりと、国レベルで見ても得意不得意というのは必ずあります。国同士の関係においても人間同士のように役割分担をすればよいのではないかと考えました。自国の発展に捉われず、地球単位で自国の役割を認識し、国際的にどのように活躍していくべきかを考え、共存していくことで世界はより豊かになるのではないかと考えました。

中国の人はエネルギーがすごいです。毎日たくさんの調味料を使った料理を食べて元気に活動しています。このエネルギーは世界規模でみてもひけをとらないと思います。自分が将来中国とかかわっていく仕事をする際には、この巨大な人のエネルギーをいい方向に活かしていけたらなと思っています。

熱烈的な歓迎をしてくださり、通常では入れないような場所に立ち入ったり、現地の大学生と交流し刺激を受けたりしたのはとてもいい経験で今回の訪中団に参加してよかったです。

## イメージの中国、見た中国

B班 高松大学 上北 祐也

私は、修学旅行で台湾に行ったことがあるので今回の訪中で訪れる山東省も僕が現地で感じた排水溝がむき出しでにおいが強く、露天での食材や食べかす、ごみなどが散乱していて交通ルールを無視するような治安悪いというイメージで中国と台湾を同じだと考えて訪中に参加しました。また、中国に対してのイメージがニュースで報道される、爆買いや福島第一原子力発電所の処理水放出に起因する日中関係が悪化していることや日本では食べられないような食材、調味料を使って生活をし、低賃金の労働者が多く、貧困な生活を国民がしている国やだとニュースの報道を見てイメージしていました。

しかし、中国に実際行ってみると空港は大きくとてもきれいで案内板も中国語と英語表記がされていて他国からくる人に対する対策もしっかりされていました。また、ごみの分別が多くされていたりごみ箱が多く設置されていたりしてごみをポイ捨てされることが少なくなっていると考えました。日本のポイ捨ての多さを考えたら中国のようにごみ箱を道路に多く設置したらポイ捨てが少なくなると思いました。この点は、日本が中国をマネするべきだと思いました。

また、訪中の6日間という中で中国の学生や周りの中国の人と接する中で日本と中国は似ているところがあり、中国の生活にも日本のものが取り入られていると感じました。

私は、訪中の期間中に多くの中国の方に親切にいただいたり親切にされている日本人を多く見ました。訪中の夜に訪れた飲食店のレジで大きいお金しかなく小さいお金がなかった際に隣のテーブルの人が細かいお金を私が支払う。「日本からせっかく来ているんだからおもてなしをしないと」と言って残りの代金と飲み物を1杯おごってくれました。なぜこんなに親切にしてくれるのかと聞くとここで出会った人は、日本に行ったことが一回あるとのことでその時に日本人に道案内や飲み物を買ってもらったとっていました。この出来事は、日本人のおもてなしや親切心が周りに回って自分に返ってきたのだと思えました。

なので私は、これから中国語や英語を喋れないからと言って困っている中国の人や英国の人がいても自分から話しかけたりしてこの出会った人のようにひとつの親切やおもてなしを多く返せるようにしたいと考えました。

私は、この訪中で日本の学生や中国の学生と触れ合って自分の語学が全く通じないと思えました。中国に行く前の自分の考えは、中国語は英語と同じように文法ではなく単語を言えたら伝わると思っていたのですが、中国で自分の中国語を使ったらず発音から違うといわれました。単語の読みをカタカナで書いていたせいで本来の発音が失われていることが分かりました。英語に関しても、訪中で一緒に行った学生と比べると自分の未熟さがしみじみと痛感させられました。自分の中では、他大学の生徒も自分くらいの英語力だと思っ

ていましたが自分が「井の中の蛙大海を知らず」という言葉と同じでとても同じ大学生とは思えないくらい英語学習に格差がありました。

私が、訪中の6日間で学んだことはとても自分が未熟だということが分かりました。勉強もそうですし、中国のことをニュースのことだけで判断していたり、自分がどれだけ自分の世界で生きていたりしていたということがよくわかりました。この訪中の経験をして「百聞は一見に如かず」という言葉を自分で意識しながら生活していこうと考えました。

## 日中友好協会 2023 年度第二次訪中団参加を経て

B 班 明治大学 宇都宮 遼馬

2023 年度第二次訪中団に参加し、中国の持つ文化的な奥深さや隣国である日本への関心の高さを肌で感じる事ができた。プログラムの中でまず印象的だったものは泰山である。その荘厳さはもちろん、この山が国民にとっていかに重要であるかを同行して下さったガイドの皆さんに教えていただきながら、森山団長や団員に負けじと登った山頂から見た景色は少しかすんでいたが、それを補って余りあるほど美しく、それでいて活気にあふれたものだった。山頂付近には「天街」と呼ばれる商店街があり、そこでは多くの登山者が軽食を食べたり土産物屋があつたりと、現代においてこの山が遠く手の届かない存在ではなく人々の生活の中に息づいているものだと感じられた。日本の山といえば富士山だが、隣国同士で同じく国のモチーフになるような山である泰山はまた違った魅力があり、登山が苦手な自分でもぜひまた訪れたと思うほどであった。この泰山と同じように生活の中における太明湖の存在も非常に印象的であった。済南が水資源に富んだ地域であり、太明湖の水は今でも日々との生活を支える水である。ガイドの楊さんがおっしゃった「家々に泉あり」ということわざは、済南がどれほど素晴らしい水資源に恵まれ、人々がそれを活用しているかということがわかる地域性あふれる言葉であると感じた。

大学生との交流の時間は十分に長くはなかったかもしれないが、限られた時間だからこそお互いの演奏や演技を集中して鑑賞できた。出会った学生には日本の文化や歴史に興味を持って学んでいる人が多く彼らにもぜひ日本に来てほしいと感じた。このようなプログラムを経験できるのは両国の国交が確立され、お互いを理解しようという意識があるからである。日中平和友好条約 45 周年という節目にこの訪中に参加できたことは非常に幸運であった。国交が正常化したこれまでの間も両国間には様々な外交的政治的な問題があつた。しかし、これらの問題をそのまま国民に転嫁し国全体に負の感情を向けるような逃避は行うべきではないと再認識した。日本という島国に生まれ、言語も人種も同じ社会に生きる我々は我知らず他国の人々をその国家によって区別してしまうことがあると私は思う。中国を閉鎖的で自由のない国だと思ふ人は少なからずいる。そういった人を含めて国民全員の意識を変えることは難しいだろう。しかし私たちはこのように交流し互いの学んだ言語を用いて交流することができている。この状況は決して当たり前ではなく五十年以上前の先達が当時国交のなかった国を理解し、人を理解しようとした血のにじむような努力の結果である。中国や韓国、現在は国交がない北朝鮮を含めてアジア近隣諸国として私たちは閉鎖的な固定観念にとらわれず互いの国や人々をもっと知る努力をする必要がある。

中国と日本、隣国として私たちは互いに共通する部分が多い文化を尊重しつつ、共に経済的・文化的な発展を達成するべきであると考え。日本という国家単体を第一に考える

ことが保守的な思想であるかのように扱われるが、1000年以上の交流を持つアジア近隣諸国との関係を強化していくことは我々の「国泰民安」につながる。山東大学や曲阜師範学校で日本語や日本文化に強い興味を抱いている多く学生がいたように、日本にも中国の様々に興味を持ち学びたいと思っている学生が多くいる。そういった学生にこそ、ぜひ実際に中国を訪れてほしい。実際に訪問してみると、自分が思っていたよりも開放的で先進的、それでいて街や人の雰囲気が独特で豊かな文化を背景に感じることができるだろう。異国の地で団員のみならず普段できないような身の上話をしたり、感想を共有して新しい視点を得たりという経験は訪中団ならではだ。中国の自然や文化に触れることで、今まで気づかなかった日本の新しい魅力に気づくこともある。私はこの訪中団に参加して、身の回りの中国の方だけでなく韓国の方も日本の方もそれぞれを一個人として理解する努力を始めた。これは六日間という短い間の訪中で私が得た最大の変化であった。

## 中国で感じたこと

B 班 四国学院大学 岡田 菜々

今回の訪中を通して、中国に対する思いが180度変わった。訪中前の私の中国に対する印象はテレビや親の影響で、犯罪が多い悪人ばかりで正直、恐怖や嫌悪感を強く抱いていた。

2日目、山東大学のキャンパスで博物館と中華伝統文化を見学し体験した。博物館は済南市で掘り起こされた土器やお墓の復元など数多くのもが展示されていた。形がきれいに残ったものが多く、その時代の生活様式や文化がよく表れていた。中華伝統文化では、15種類の中国文化を体験することができ昔遊びや音楽を体験した。青銅でつくられたものを大きさ別に並べた楽器は、青銅の大きさや、同じ青銅でも叩く場所によって音が変化するため奥が深い楽器だなと感じた。夜は山東大学の学生と晚餐会を楽しんだ。豪華な料理と同じ班の中国人学生や日本人学生とおしゃべりをしながらお互いの国のことについて語り交流を深めた。パフォーマンス発表では、演奏をしたり読み聞かせをしたりしていた。その中でも私が一番感動したパフォーマンスは心さんの太極拳だった。中国の伝統護身術である太極拳は、アルミ製の剣を使って1～2分間動いて技をしていく競技で私は今回初めて見た。素早い動きと一心乱れぬ剣さばきで会場が圧倒されるほど素晴らしいものだった。

3日目、泰安市でお茶の体験と泰山の山登りを行った。泰山茶溪谷では始めに先生の作法を見学し、その後自らがお茶を入れる体験をした。中国の茶道は日本の茶道と使う道具も座り方も違っていった。また、日本では抹茶を使うのに対して中国では茶葉を使って急須で入れていたのでその点に関しても大きな違いを感じた。中国の茶葉は独特の香りがあったが、身体にも優しく落ち着く香りでも美味しかった。午後には標高1545メートルもある泰山に登った。途中まではロープウェイで登り、約40分程かけて頂上に登った。標高が高くなるにつれて飛ばされそうなほど風が強くなった。途中でしんどそうな友達がいたが皆で励ましあって全員が無事に登ることができたのでよかった。

4日目、中外青少年交流基地にて文化体験、交流会をした。ここでは、書道や版画、漢服の体験をした。版画は、中国人学生と協力しながら孔子の全身を刷った。英語でコミュニケーションを取ったのだが、私の英語レベルが低く必死に理解しながら作った。3回目の挑戦にしてようやく綺麗な孔子を刷ることができとても嬉しかった。

5日目、青島ビール工場を見学した。昔実際に使われていた窯や機械を見ることができ、ビールの歴史を楽しく知ることができた。また、私は未成年のため飲めなかったが2種類のビールを試飲することができ、ビールのつまみになるハニーピーナッツも貰えた。

私はこの5泊6日の訪中を通して、今までにないほどの学びと新しい発見があった。中国文化を体験したり中国人の方との会話をする中でこれまで私の中にあつた中国人に対す

る恐怖や嫌悪感が無くなった。中国人学生の皆さんは、私たちにたくさん話しかけてくれ、積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれた。これからは、固定観念に捕らわれることなく自分が見たもの体験したものを信じて生きていきたいと思う。また、今回だけの活動で終わるのではなく、日中の活動に関わりたいと思った。

## 初の中国訪問を終えての印象

B 班 香川大学 岡林 徹

今回の日中友好協会の訪中団への参加理由として、今までのように中国に対するイメージをメディアなどを通して持つのではなく、実際に中国に行きその国を詳しく知りたいという思いがあった。中国に今までいったことがないにもかかわらず、中国に対してネガティブなイメージを持っていたため、訪中することでそれがどう変わるのか、また、自分が経験したことを周囲の人に伝え、日中友好を深めていきたいという思いもあった。6日間という非常に短い期間ではあったが、初めての訪中を通して、中国に対する印象で変化したことと変化しなかったことがあった。

訪中前の中国に対するイメージとして、支払いは全て ALIPAY などのスマートフォン決済、急速な経済発展、空気汚染、GOOGLE などインターネットの使用制限などがあり、これらのイメージは訪中後も変化していない。小さい通りにある個人店でもキャッシュレスが利用可能であること、HISENSE の企業訪問や青島の港でコンピューターを用いて全て制御できる社会を実際に実現していたこと、YOUTUBE などへのアクセスが禁止されていたことをなどが例としてあげられる。これらの印象は変化しなかったが、それ以上に変化したこと・楽しかったことが多くあった。

まず、中華料理に関して、中国のご飯というイメージで地域によらず似ているのかな、という印象を持っていたが、済南や青島で食べたごはんはそれぞれに特色があった。済南では油を多く使用した料理が多かったが、青島などでは済南ほどは油が多く使われておらず、曲阜では孔子の歴史をモチーフとした食事があった。総じて、中国のご飯はおいしかったが、テーブルに積みあがるほどご飯がどんどん出てきたことがあり、全部食べ切れず非常に多くの料理が残っていたため、フォードロスを少なくできるように改善するべきだとも思った。

次に、今回の中国訪問の中で、もっとも印象に残っていることとして、曲阜で買い物をした際に、中国語はほとんど話せなかったが、65 元から 35 元まで値段交渉をして自分が欲しいものを買うことができたことだ。お店が並んでいる通りに入り、店頭に並んでいるものを手に取ったり、少しでも興味がある感じで見たりすると、お昼ご飯を食べている店主の人でも元気よく声をかけてくれることがあり、すごく楽しく面白い経験だったが、中国語がほとんど話せない状態だったため、何を言っているのかほとんど理解できなかった。お店で買い物をする中で、龍、孔夫子、十の中国語を学んだ。「二つで 10 元だから買ってー」、「これがお似合いやと思いますよー」といったような感じで声をかけてくるので、数字やその時に使用した簡単な単語を覚えることができ非常に楽しかった。65 元の楽器を購入した際に、店主が提示したスマホに 35 元の数字を売って、値引き交渉して買うことができたが、後から考えるともう少し交渉できたかもしれないと思い少し悔しさがあっ

た。そのため、機会があればまた値引き交渉をしたいと思っていたが、今回の訪中の中では機会がなかったため、今後中国に旅行する際に再度試してみたい。

最後に、今回の山東省への訪問を通して、中国に対する印象が変化しなかったこともあるが、変化したこと、中国・中国人の良い点や楽しいことを発見することができたので、この経験を周囲の人に伝えることで日本人がさらに中国に興味を持ち、交流が促進されるようになると良いと思う。また、現地人と様々な話をし、値引き交渉もできるように今後中国語を勉強し、山東省やそれ以外の様々な地域を訪れ中国を身近な存在として捉え、より良い関係を築いていきたい。

## 中国という国の力の根源とは

B班 筑波大学 岡本 みもり

現在の中国は国内総生産が世界2位となっており、生産額は日本のはるか上をいく。私は今回の訪中団の中で、そのような中国の急激な発展の背景を垣間見ればと考えていた。それまでの私は、歴史で学んだ偉大なる文明の数々と現在の主権国家としての中華人民共和国が結びついていなかった。日中間を含め多くの戦争を経験した中国はその近代の数十年により多くの慣習・歴史は途絶え、急激な近代化によってその面影を見ることができなくなっているのだと勝手に想像していた。しかしその傷跡をも糧として文化は強化され受け継がれていた。

例えば、今回訪問した孔子府・孔子廟や泰山は今でも中国国民にとって人生で一度は足を運びたい場所となっている。中国の人々が孔子とその教えである儒学を大切に思ってきた証拠だと考える。また、中国の方々の温かさにも触れることができた。日本人への印象は様々あるだろうと推測するが、中国語が全くできない私にもボディランゲージを駆使して伝えてくれることも多々あった。「子曰く、躬自ら厚くし、し而薄く人於責むらば、則ち怨に遠ざかる矣。」という孔子の教えがある。これは、自分には厳しく人には優しくという教えであり、心優しい中国の方と接する度にこれを実感し心温まった。さらに、青島は傷跡を糧にした象徴だと感じた。そもそも青島が発展した背景には一次大戦時のドイツによる占領の歴史がある。小さな漁村だった青島はドイツによって開発され、さらにその後日本による占領を経て短期間に急成長した。また青島ビールはドイツによる占領と青島の良質な地下水が醸造に適していたことが背景となり、青島の名物となった。つまり、ドイツ・日本による占領の歴史を負の遺産とするのではなく、それらを乗り越え発展を成し遂げたことは、中国の懐の深さであり長い歴史ゆえの柔軟性によるものだと感じた。以上のように現在の中国も確実にその果てしない文明の連続の一部であり、脈々と受け継がれた文化の延長線上に今の中国国民の生活が成り立っているのだと実感した。

中国発展の背景にはもう一つ要因があると考えた。交流した山東大学の大学生は人が多すぎると嘆いていたが、それこそが中国の発展の礎であるのだと感じている。資源が多い、技術がある、先進国である、どんな歴史的・地理的・社会的・経済的優位性であろうと、それを利用し生かす「人」がいなければ国を存続させていくことはできないのだと思う。長い歴史や多くの文化も咀嚼し消化する人々がいなければ、現代においてその姿を見ることは叶わなかっただろう。「3人よれば文殊の知恵」といことわざがあるが、現在の中国はまさに「14億人よれば文殊の知恵」状態である。AIではなく人自身が歴史から学び、思考を繰り返すからこそ、知恵や工夫が生まれていくのだと思う。そうやって着実に発展していく。今の日本にはない中国の力だと感じる。したがって、長い歴史と人という資源、この2つがあるからこそ現在の中国の大きな力は維持されているのだと考える。

今回の訪中団では、多くの中国の良い面ばかりを見せていただいたように思う。悪い面も含め、中国という国が私にまだ見せてくれていない側面がたくさんあると思う。中国という沼にはまった今、新たな一面を探しに再び中国を訪れたいと考えている。

## 山東省派遣を経た私の中国への想い

B班 山梨県立大学 小澤 望乃

日中友好訪中団の山東省派遣を終えて、私の中国への想いは強まった。この訪中団は、日中両国の友好関係を深め、文化交流を促進するために派遣された。山東省は中国の東部に位置し、歴史的な遺産や文化が豊かに残る地域である。この派遣を通じて得た経験や気づき、私の想いについて、記述する。

まず、山東省の歴史と文化を直接目で見て、感じる事ができたことは非常に貴重だった。済南市や青島市、孔子の故郷である曲阜市など、訪れた場所は歴史的な価値が豊富であった。古代の建築や遺跡、伝統的な行事に触れることで、中国の歴史と文化がどれだけ深く、多様であるかを理解することができた。特に孔子廟や孔廟、孔子像の前で、中華文化の根底にある哲学と教育の重要性に感銘を受けた。これらの場所を訪れることで、中国の歴史と文化への尊重が一層深まった。

次に、地元の大学生との交流は、異なる文化背景を持つ者同士が共に学び合う素晴らしい機会となった。言葉の壁がある中で、笑顔や手振り、共通の興味を通じて意思疎通を積極的に図った。彼・彼女たちの日常生活や学習環境に触れることで、中国の大学生の苦勞や夢、将来への期待を理解することができた。それと同時に、私たち日本人の大学生の日常や流行っているものについて強い興味を示してくれたことがとても嬉しかった。これが、お互いの国や文化に対する理解を深め、友情の絆を築く基盤となっていくのではないかと思った。また、山東省の方々は温かく、熱烈に歓迎して下さった。言葉ではもちろん、食べきれないくらいのたくさんの熱い料理を毎回用意して下さったことには感謝しきれない。

そして、経済や社会の変化も感じる事ができた。山東省は急速な経済発展を遂げており、現代的な都市部と歴史的な風情が融合している。経済発展とともに、地域の均衡を取り戻し、持続可能な発展への取り組みが求められていることを実感した。また、大気汚染や水質の悪化など、環境に対する課題に対する取り組みや改善策も進んでいることを知り、持続可能な未来に向けた努力が感じられた。これは、私たちが国際的な視点から環境問題に取り組む重要性を再認識させられる瞬間であった。

最後に、この訪中団でたくさんの中国が好きで友人たちに出会えたことが私の自信につながった。「中国が好き」と言うと、「なんで?」、「どこが良いの?」、「日本が嫌いな?」といった返答を貰うことがあった。そのたびに私は少しずつ傷ついていた。しかし、訪中団のメンバーは皆、中国にルーツのある子や中国語を学んでいる子、中国に興味のある子ばかりだった。そんな仲間たちに出会えたことも、大きな収穫だったと考える。

この訪中団を通じて、日中の友好関係の大切さと、私たち大学生がその一翼を担える存在であることを強く感じた。両国の若者が互いの文化を理解し、協力して未来を築いていくことが、世界の平和と安定に寄与できると確信した。これからも、異文化理解と友好の促進に努め、自らの役割を果たしていきたいと強く思う。小さなことではあるが、まずは、新聞投稿や大学のホームページでの発信を通して身近の人たちに私の体験と想いを伝えていこうと思う。

## 歴史を学ぶことの意義

B班 筑波大学 笠原 葉子

真っ赤なネオンがキラキラと光る住宅や建物。電線のない街並み。電動バイクと自動車に分けられた広々とした道路。自動運転の運搬車が港内を秩序よく走る青島港全自動化埠頭。見たものすべてのスケールが圧倒的、そして新鮮で、今も私の頭から離れない。

そして、孔子の教えに触れた曲阜。ここで、今回の訪中の一番の大きな収穫があった。それは、私自身、人が歴史を学ぶ理由について垣間見ることができたこと、そして自分の中から歴史を学びたいという沸々した思いが湧き上がったことだ。恥ずかしながら、私自身はこれまで学校で歴史をあまり学んでこなかった。そしてそのことにあぐらをかいて、日本や世界の歴史をそこまで知らなくても仕方がないというスタンスで生きてきた。しかし今回初めて中国・山東省を訪れ、孔子廟といった歴史的な遺産に触れたり、中国文化を肌で体験したりする中で、その考えはあまりにも幼稚だったと考えを改めた。教養として歴史の知見が少しでもあれば、訪問先での感動が数倍になったのではないか、目にするニュースの解像度が上がったのではないか、日中関係に対しての考えがより深まったのではないかと何度も感じた。歴史を学んでこなかったからといって、歴史に無知であることを正当化できる訳ではない。

古代から現代まで、豊かな文化や激動の歴史を持つ中国。その国の土地に足を踏み入れてはじめて、私は自分の無知さに恥ずかしさを感じた。しかしその恥ずかしさ、情けなさは私にとっては大変貴重な気づきだった。なぜならそれは、私に歴史に対する興味や好奇心を与えてくれたからだ。

日中友好協会の前田さんが、「良くも悪くも、中国に対して思い込みも思い入れもなかった。」ということを知っていたが、訪中前、私もまさに同じだった。そんな自分がこの時期に、中国に実際に足を運べたこと、中華圏に興味関心を持つ個性あふれる同世代の仲間に出会えたこと、現地の大学生と食事を囲みながらお互いについて話をすることができたこと、中国人の方の親切心や人懐っこさに触れたこと、すべての経験が大変価値のあるものだった。この訪中で得た率直な意見や経験を、自分の周りの人にも伝え、中国を身近に感じてもらうことが、私が今果たしていくべき責務であるのではないかと思う。

そして最後に、中国で口にするとてつもない種類と量の美食の数々を、ここに書き記さずにはいられない。なぜなら中国という国を五感で体感できた経験のひとつが食事だった。毎食、絶品の中国料理を堪能した。日本で食べ慣れてきた麻婆豆腐、エビチリ、青椒肉絲等々は本場では一切登場せず、驚きの連続だった。色も種類も豊富な饅頭、優しく身体にしみわたるお粥、柑橘系の味付けの鶏肉の炒め物、タロイモ入りパイ、蟹と海老が入った点心、具材たっぷりの煎餅、あたたかい菊花茶。皮がパリっとして体が柔らかい北京烤

鴨、良くわからないけど栄養豊富そうな生姜スープ、自分好みのつけだれで味わう火鍋(個人的にはゴマだれ+オイスターソース+香菜+ゴマ油がベスト)、ほんのり甘い地瓜球。もちもちで癖になる高粱飴。お腹が空いてきそうなのでここまでしておく。

今回、このような貴重な機会を与えてくださった日中友好協会の皆さま、学校関係者の皆さま、つきっきりで私たちを案内してくれたバスガイドのお二方、すべての方に感謝を伝えたい。

# 訪中を終えて考えたこと

B 班 慶応義塾大学 加藤夏朗

今回の6日間の訪中を通じて、各テーマに分けて書いていこうと思います。

## ・訪中前と訪中後の中国や中国人に対する気持ちの変化

結論、特定の国や国籍に何かイメージを持つということはしないようにしているので中国や中国人に対する気持ちの変化はないですし、今回の訪中で中国が初めてなわけではないので、なおさらには変化はないです。

しかし、中国を訪れる前と後での気持ちや考え方の変化は、多くの人にとっては興味深いテーマです。初めは予想やイメージがありますが、実際に訪れるとそれがどう変わるかは個人によって異なります。一方で、日本と中国の関係についても考える必要があります。お互いの歴史や文化の違いを尊重しつつ、着実な関係を築いていくことが大切です。中国を訪れる前、多くの方は興味や期待を抱きますが、同時に不安や疑問も持ちます。メディアや周囲の情報から得たイメージがあるため、その期待と現実のギャップに驚くこともあります。しかし、実際に中国を体験すると、文化や風景の豊かさ、人々の温かさに触れることができます。予想外の発見や素晴らしい体験が、前と後での感情や考え方を変えるきっかけとなることがあります。

## ・そして日本は隣国として中国とどうどのように付き合っていくか

日本と中国の関係については、歴史的な摩擦や政治的な問題もありますが、お互いの文化や経済的なつながりも深く、両国間の交流は欠かせません。これからも隣国として、相互理解を深める努力が重要です。文化交流や教育交流を通じて、お互いの良さを認識し合い、対話を重ねることで、より良い関係を築いていくことができるでしょう。また、両国の間での協力や対話を通じて、地域や世界全体の平和と安定に貢献できる可能性もあります。共通の問題に対して協力し、信頼関係を構築することで、両国の関係はより建設的な方向に進むでしょう。要するに、中国を訪れる前後の感情や考え方は個人差がありますが、お互いを尊重し、理解し合う姿勢が重要です。日本と中国は隣国でありながら、異なる文化や歴史を持っています。それを認めつつ、共通の利益や価値観を大切にし、着実な友好関係を築いていくことが必要です。

## ・この6日間が自分の人生にどのような影響があったか

中国人との付き合い方よりも、日本人との付き合い方に苦労しました。ある意味これが一番勉強になったと言えます。訪中団の中には旅に慣れている人もいれば、海外旅行自体が初めてだという人もいます。バックグラウンドが違う人々が「団」として海外に行くこと

はそう容易ではありません。私は一人でバックパッカーをするのが趣味なので、海外旅行が得意な方だと自負しています。それが故に、パスポートの管理が甘い学生や、海外なのにボケーっとしている日本人学生についイライラしてしまいました。イライラが態度に出ないように、自制するのにとても苦勞しました。今までの自分より、少し大人になれたという面で

今回の訪中は人生に大きな影響を及ぼしたと言えます。バックグラウンドが違う人々の団体をまとめてくれた、引率の方々はすごいと思いました。ありがとうございました。

# 武術太極拳と中国と私

B班 高松大学 木村 心

私は武術太極拳という中国の伝統的な競技に取り組んでいて、昔から中国には興味がありました。武術太極拳の動きには中国人にしか分からないリズムがあります。それを習得するにはただ中国人選手の動きを研究するだけでなく、中国の文化や言葉、人々の雰囲気を知る必要があります。そのために以前から中国語も勉強しており、いつか中国の街の雰囲気や伝統を肌で感じたいと思っていました。

実際の中国は自分が想像していた通りの国でした。中国ドラマで見ていた街並みや中国人の雰囲気は想像していた通りで、私もドラマの中の世界に入ったかのような気持ちになりました。街で聞こえてくる会話は全て中国語で、看板や建物の名前も全て中国語。ずっと行きたかった国だった身としては、本当に全てが最高の6日間でした。また、実際に中国人と中国語を使って会話ができた時はとても嬉しかったです。現地の学生とはいろんな話題で盛り上がり、連絡先を交換したり、日本に戻ってからも連絡を取り続けるほど仲良くなれました。特に楽しかった時間は、お互いの好きな音楽を教え合った時間です。歌詞の意味はわからなくても「いい声だね」とか、「このリズムがいいね」と共感し合えたり、私の大好きなアーティストの曲を相手も知っていて盛り上がれたり、改めて音楽って素晴らしいなと思えました。

しかし、会話の中で聞き取っても分からない単語や話したいことの中国語がすぐに出てこなかったことは悔しかったです。一緒に訪中していた日本人学生の中にも私よりはるかに中国語のレベルが高い学生が沢山いて、とても刺激になりました。普段香川県で生活していると、中国に興味を持ったり中国語を勉強している同世代はほとんどいなかったのですが、今回の訪中で中国に興味がある仲間と沢山出会えて嬉しかったです。もっともっと中国語のレベルを上げたいと純粋に思いました。

そして今回の訪中での私の一番の収穫は、私の武術太極拳の演技を見てもらうことで、沢山の皆さんに武術太極拳の素晴らしさを伝えられたことです。以前より自分の武術を、本場の中国で中国人に見てもらいたいと思っていました。その機会を二度も与えて下さった日中友好協会様には心より感謝します。私の夢の一つが叶って幸せでした。演武を披露した後、沢山の皆さんから声をかけてもらえました。中国人だけでなく日本人学生にも興味を持ってもらえて、武術太極拳の魅力を伝えることができました。しかし、中国でも若い世代にはあまり武術太極拳は知られていないのか、山東省には武術太極拳のレジェンド的な有名な選手もいるのに、それが知られていなかったのは少し残念でした。でも、私が武術太極拳をやっていないければ繋がることのなかった出会いが沢山ありました。武術太極拳が好きで、ここまで辞めずに続けて来てよかったなと心の底から思いました。

今回の訪中のおかげで、私は、自分の世界が広がった気がします。生まれも育ちも香川県の私は、自分の育ってきた環境がどれだけ小さい世界だったのか気づきました。一方で、人生で初めて海外で6日間も過ごすことで、私はやはり生まれ育ったこの日本が大好きだということも改めて実感しました。沢山の中国人に出会って、一緒に訪中した日本人学生とも交流して、視野がとても広がりました。帰国した今は、仲良くなった中国人の友達が恋しいです。また中国に行きたいし、彼らが日本に来たときは必ず案内すると約束しました。日中交流も日々交流もとても充実した訪中でした。私は中国も日本も良いところ悪いところ両面あると思うので、これからも学びを続け、交流を深め、認め合い、共に未来を語り合える仲間として更につながっていきたいです。

## 訪中を終えて考えたこと 違いから学びたいこと

B班 神田外語大学 小林 桃子

私が4年間専攻として学んできた中国語及び中国を学生のうちに訪れられる最後の機会として応募した。山東省での現地学生との交流や歴史的な建造物、企業への訪問など素晴らしい体験が濃縮した5日間であった。本レポートでは、中国で感じた日本や他国との違いを元に、中国の高い合理性と観光資源の有効活用について検討する。

第一に、一貫して新しいテクノロジーを取り入れ、合理性が高いと感じた。例えば、AI技術などの積極的な導入である。訪問した青島ビール工場や青島港自動化埠頭では、AIや専用のロボットを利用し無人化が積極的に進められていた。さまざまなリスクもあるため100%無人で行うことは困難だろうが、気候変動が進む今、人間が安全に働ける期間は減少してきている。効率の向上や過酷環境で働く人を減らすためにも、今後最新テクノロジーの導入は必要不可欠だと考えた。そのような技術の下支えをしているハイセンスにも訪問したが、BtoB、BtoCを問わず多様な分野で採用されているようだった。このような成果を短期間で実現可能にしたのは、企業努力もあるが国を挙げて政策面での強い後押しもあるのだろう。その他にも、デジタル広告の普及に驚かされた。市街地の至る所で大型ビジョンの広告が打ち出され、高速道路の入り口までモニターが設置されていた。紙やポスター型の広告の端にはWeChatのQRコードがあり、更なる情報を得るためには、コードを読み取る方式をとっていた。連絡手段としての利用は想定していたが、ほとんどの企業や組織がWeChatを持ち、これほど重要な生活インフラの一つとして機能していることに驚嘆した。世代や地域を問わず携帯やWeChatの普及が進んでいることが推察できる。

第二に、観光資源の有効活用がなされていると考えた。山東省は観光地が豊富で、短い日程の中でさまざまな観光地に足を運ぶことができた。特に、孔子府や泰山など訪れた場所はほぼ整備されていた。ガイドさんの声を聞くことのできるイヤホンで現地の小学生も使用して、1人ガイドさんがいれば団体でも詳細な説明を聞くことができるようになっていた。日本でも、屋内の博物館だけではなく、屋外の施設でも普及がすすめば、より多くの人々がその地について知ることが出来るだろう。観光施設では至る所で小さな商店があり、オリンピックセーリングセンターではキッチンカーが多く立ち並び、ビジネスチャンスを最大限活かしているように感じた。さまざまな観光地を維持、管理していくためには、多額の費用がかかるだろう。その点で、ビジネスチャンスの積極的な活用は学びたい部分であった。その一方で、課題は外国人観光客にとっては支払いの難易度が高い点だ。今回は衣食住を用意していただいていたので、ほとんど個人商店などで支払いをする機会がなく、すべて現金が利用できた。QRコード決済の普及で個人商店や市場などでは、現金での支払いを受け付けていないという話を周囲の中国人からよく聞く。中国国内の銀行口座を持っていない外国人観光客にとっては、決済が難しいだろう。今後復活しつつある外国人観

光客向けの交通 IC などを内蔵したカードが発行されることを期待する。私自身は4年間学んできた中国語を使用する機会もあり、今までの学びは決して無駄ではなかったと認められたような気持ちになった。その一方で、方言や少し深い話になるとリスニング能力や語彙の不足を痛感した。中国語をより学びたい、中国についてさらに知りたいというモチベーションになった訪中であった。

最後に、今回の日中友好大学生訪中団を実現してくださった関係者の方々に厚く御礼する。現地の関係者の皆様、日中友好協会の皆様、共に学んだ大学生との素晴らしい出会いを生涯忘れないだろう。

# 中国へ行った訪問前との印象の変化

B班 山梨学院大学 佐藤 凜

私は今回の訪中団の企画で初めて中国に訪問した。私は大学で中国語を履修していたが中国へ行く機会はずっとないだろうと思っていた。ある日講義の教師から日中友好協会という協会があると初めて聞き、そのプランがとても魅力的だと感じ私にとって良い機会になると考えた。私はもともと海外へ行く番組を見ていて中国へ行く回も多々あった。中国はテレビやネットの中の世界で行く前の中国人の印象は気が強くとても怖いイメージがあった。しかし実際に行って対話をしなければ何もわからない、印象だけで決めつけてはいけないと思い行くことを決意した。

## 中国の食文化

私は食文化についても深い興味を持っていた。私はよく人が食事をする動画を見ていた。その中には気になる文化の異文化の食事だったり実際に海外の料理を食べてみたいなのを感じていた。まず中国と日本の食文化で違う点を見つけて驚いた。日本では歓迎の料理でも少なく盛り付けられ量より見た目、味などを重点的に感じる歓迎料理がたくさんあるが、訪問時に出された料理はテーブルに満遍なく料理が並べられ一目見ただけで完食できない量だとわかるほどたくさんの料理を振る舞われた。だが現地の方に聞くと、全部食べて完食しろというわけではなく来てくれた人にお腹いっぱいまで食べさせるという一種のおもてなしだった。さらにたくさんある料理で一つ一つの料理のクオリティがとても高く、満足して料理を楽しむことができた。私は異文化の食事は美味しい料理があるとは思っていたが今回の中国への訪問で日本に帰っても作って食べたいと思ってしまう料理があった。その料理は『菠菜花生米』という料理でほうれん草とピーナッツの冷菜だ。ほうれん草にピーナッツ、味付けにニンニクや黒酢、ごま油といった調味料があわさってこんなに美味しい料理が中国にあるのだなど、中国を訪れなければ出会えなかった料理にとっても感動した。

中国の料理は全体イメージを思い浮かべると「赤」という感じの印象だったので辛い料理が多いと思っていた心配していた部分があった。だが実際には食べれる料理もあり行ってみなければわからないことはたくさんあると感じた。

## 中国に対してのイメージと訪問後の印象

中国への訪問へ行く前に日本と中国の間で問題が起こった。日本の処理水放出で中国人が怒りを露わにして日本へ一般の家庭へ電話をしたりお店へ電話したりと、中国との関係

が悪くなっていた。実際に私の家族の仕事先で電話が中国からかかって来たと聞き今回の訪問は少し不安を抱えたまま行った。もしかしたら何かあるかもしれないと感じていたが実際は生活や振る舞いは日本と違えど観光や食事などは楽しくでき日本と変わらないシステムや最先端技術、特に深く感じ取れたのは訪問スケジュールにもあるハイセンスグループの見学で高い技術のテレビや医療機器などを見て感動した。青島港自動化埠頭を見学した際も自動でものを運ぶ機械などを見て驚かされ怖いイメージから中国人は日本とはまた違う素晴らしさがあると印象が大きく変わる機会となった訪問だった。

#### これからの中国への見方

私は今回の訪問で中国への印象が大きく変わった。それは実際に中国を体で体験できたからだ。訪問が終わり日本に帰ってきた際は見学した先や伝統文化などを調べたり、食事や風景について調べたりした。訪問へ行く前は中国のことを調べることはなかったので私にとっての大きな変化になった。今まではなんとなくで中国語を勉強していたが今では簡単な会話は聞き取れるくらい上達したいと考えている。この訪問で中国への印象と自分自身への変化が得られた。この訪問で学んだことをこれからの人生のなかで大事にしたい体験となった。

## 中国に行って気づいたこと

B班 城西大学 鈴木 咲愛

私は高校生の頃漢文を読むことが好きだった為、大学1年生の時から中国語の勉強を始めた。どんどん中国語を勉強することが楽しくなり、中国の文化や伝統を知りたい、本場の中華料理を食べてみたい、中国に行ってみたいと思い今回訪中団に参加した。実際参加してみると、参加した人全員中国に興味があってその意欲に少し驚いた。このような貴重な6日間の訪中団に参加出来たのも、埼玉県日中友好協会のお陰だ。

テレビでは、中国についてのニュースをやっていてよく目にしていた。だが、そのニュースは悪いニュースが多かった。例えばコロナウイルス感染症の問題や福島原子力発電所の処理水の問題など、中国が悪く見えるようなニュースが多かった。その為、訪中団に行く前は正直中国に良い印象は無かった。実際中国に行ってみると、現地の方がお出迎えをしてくださったり日本が大好きな学生に会うことが出来たり、ニュースで見ていた悪い印象は無くなった。ニュースだけで、その国を判断するのではなく実際に行って学び、自分の目で見て、聞くことが大切だと気づいた。

2日目に現地の大学生と一緒に授業を受けて、大学の博物館と伝統文化体験センターに行った。実際に伝統の物を見て学ぶことはとても楽しく、勉強になった。夜には、現地の大学生と一緒にご飯を食べながら交流した。その際、周りは中国語を話して現地の大学生と交流していたが私は全然中国語を話すことが出来ず悔しかった。もちろん、翻訳アプリで話すことは出来たが自分の言葉で伝えたいと思った。日本に帰ったら、もっと中国語を勉強して話せるようになりたいと強く思った。この時に、帰国してから自分は何をするべきか明確になった。

私がこの訪中団で1番印象に残っているのが、4日目の中外青少年交流基地文化研究活動である。中国の伝統の踊りを見たり、伝統の楽器の演奏を聴いた。さらに、切り絵を実際にやってみたり漢服を着させてもらったりなどとても濃い時間になった。現地の方にとっても親切にサポートして頂いたお陰で私達訪中団は楽しい時間を過ごすことが出来た。

さらに私はこの6日間の旅で、自分のやりたいことを見つけることが出来た。ずっと自分のやりたいこと探し続けていて自分は何がやりたいのか分からなくなる時期もあった。今回中国に行って、楽しいことだけでなく悔しい思いもして振り返ってみると濃くて短い6日間だった。そこで、私は本当に自分がやりたいことに気づくことが出来た。やりたいことをする為にまずは、中国語を話せるようになるという目標を達成したい。

普段の旅行では行くことが出来ない場所に見学に行くことが出来たり、日本の中華料理とは少し違った本場の中華料理を沢山食べたり、色々なことを体験させて頂いた。中国に行く前は、中国にあまり良い印象が無かったが最終日には中国に良い印象を持ち、さらに中国を離れるのが寂しいと思った。

また、現地で出会った方々との縁も大事にしたいがこの訪中団を通して出会った日本人学生との縁も大事にしていきたい。

# 異文化理解とは

B班 日本大学 鈴木 萌依子

今回、日中友好協会による本企画に参加し、実際の中国を自らの五感で感じた経験は、学校教育、メディアの言葉などによる「誰かが定義づけた中国」を自分なりに解釈し、特にそれが問題視されることなく心の中の無意識に刻まれていくといった事態を打開する、非常に意義深い経験であったように思う。情報社会に生きる中で、一度立ち止まって「中国とは何か」を考えることのできた今回の経験は、日本と中国の関係を断片的にではなく、現地で感じたことを踏まえて見つめられた機会であったと思う。私が訪中で印象に残ったことを3つ挙げていこうと思う。

一つ目は、二日目の午後に、山東大学において中国文化の体験や博物館の見学、晩餐会を行ったことだ。博物館で古代中国において使われていた青銅器を見たとき、3000年前に中国大陸と日本を繋いだ人が確かに存在し、青銅器のような高度な技術を日本にもたらしたこと、中国と日本の関係は古代から続いていることを考えると、尊敬すべき国であると率直に思った。晩餐会では、日本語を学ぶ現地の学生と沢山の会話をする事ができた。なぜ日本語を学んでいるのかを聞いたところ、日本のアニメが好きだからと伺った。私も漫画を読むことが好きなので、中国にも共通の趣味を持つ友達がいるという事に喜びを感じた。今までは自分が好きだから読んでいた漫画も、「日本のアニメ文化」として誇りを持っていいのかもしれないと思った。

二つ目は、三日目に泰山に登ったことだ。この山岳地帯は世界遺産として登録されており、また泰山は中国の思想・文化の基盤になった道教の聖地と言われている。紀元前の時代には、秦の始皇帝が「封禪」という儀式を行ったことをきっかけに、多くの歴代皇帝が「封禪」の儀を行ったともされているようだ。日本の山では見られないような自然の風景や、規模の大きさを肌で感じる事ができた。山頂では、中国の歴史を感じられる宗教的な建物を見ることができた。とても神秘的な空間であった。歴史的に見ても、山において宗教的、哲学的な思想の発展がされやすい。泰山が、現代にも形を変えて様々な場面で応用される哲学的思想の発祥地であるとするならば、この山は「訪れた人に何かしら知見を与えてくれる山」かもしれないと思った。ここで私が得た知見をひとつ紹介する。それは、「大自然の道理に人間の力は及ばない」という事である。

三つ目は、四日目の午前の世界文化遺産に登録されている孔府・孔子廟の見学をしたことだ。赤い建物に広大な敷地が印象的で、儒学の学問や礼儀を大切にする姿勢の強さが建物の門のつくりや、門をくぐる際の敷居の高さから感じ取ることができた。孔廟が中国三大宮廷建築のひとつであるとされているだけあって、その荘厳さにはおどろかされた。中国の人は孔子を尊敬する人が多いように思う。儒学は日本においても影響を与えたものである。例えば集団生活において相手に思いやりの心を持つ「仁」、礼儀を重んじる「礼」、

年上の人を敬う事「義」などである。また、この地の見学において最も印象に残ったことは、「論語が焚書坑儒により焼かれてしまいそうになったのを隠し通したがために今に論語が残され親しまれている」といったことを知ったことである。明治初期、日本の経済発展の中核を担った渋沢栄一という人物は、「論語」の思想を基にして経済発展を計画していった。もしこの焚書坑儒により「論語」が焼かれてしまっていたら、現在の日本の経済発展はなかったのかもしれない。そう思うと、中国の学問、思想を尊く思わずには居られない。

中国に行く前は、何となく中国に対し怖いイメージを持っていた。その理由は政治的な問題のほかに、中国製餃子による食中毒事件のことや、汚水の問題、大気汚染などの中国に関する問題のメディアでの報道の仕方がネガティブな印象の物ばかりであったからだと思う。今回中国に行って感じたことは、中国は日本の敵ではなく、経済や学問発展の先生であるという事だ。現在は、国際関係の問題により中露関係のことも考慮する必要があるため、企業などの関係者にとっては日中友好に対して難しい考えを抱いてしまうかもしれない。けれども、私たち一人一人の認識が隣国間の友好に向いているのであれば、それだけでも日中友好に貢献していることになると思う。私自身、この企画に参加して感じたことを大切に、これからも異文化理解に努め、自分自身をも成長させていきたいと考えている。

# 人の優しさ

B班 横浜国立大学 西 陸之介

この感想文には、訪中前と訪中後の中国（人）に対する気持ち・考えの変化、日本は、そして自分は、隣国隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくべきか、この6日が自分の人生にどのような影響があったか等、思いを含み、特に中国の人たちに出会った私の思いを中心に文章にする。

訪中から二か月ほど前、一つの動画が話題になった。中国の人が海に天然水を注ぐ動画である。この動画の趣旨は日本の汚染水が海に流れ出したため、浄化をしようというものだ。この動画を見る限りでは、日本を好ましくは思っていないのだろうか、日本と中国の歴史的な背景を考えると、第一次世界大戦、日本が青島を占領したこともあり、歓迎されるのだろうか。そのように考えていた。

山東大学を訪れ、現地の学生と交流する機会を頂いた。日本語専攻の学生は僕たちを温かく迎えてくれた。そして積極的に日本語で話しかけてくれ、自分の日本のどこが好きなのかということを熱弁してくれて、日本人として私はとても嬉しかった。

曲府師範大学ではとても素晴らしいパフォーマンスを披露していただいた。曲府師範大学の学生たちは日本語専攻ではないにも関わらず、真心を込めた、パフォーマンスであった。日本の学生が中国の何について知りたいかが念入りに考えられ、それに対応したプログラムになっていた。私は多くの大学生と連絡先を交換した。彼女らと山東省の写真と私が持っている日本の写真を交換したりすることができた。

泰山に登った際は、山東省人民対外友好協会の方から小籠包を頂いた。とても嬉しかった。孔子廟を訪れた際、私は参拝の仕方が分からなかった。だが周りの中国の方たちは温かい目で見守ってくれた。

青島の五四広場で現地の人と交流する機会もあった。私たちは青島付近で見たいパフォーマンスがあった。だが詳細な場所が分からず、中国のカップルに聞いた。私たちは中国語で話しかけたが、伝えることができなかった。困っていると、向こうの方が、翻訳で我々の話を聞こうとしてくれた。

また写真を撮ってもらおうと別の中国のカップルに写真をお願いした。その方は丁寧に写真を撮ってくれ、私たちはビル群を背景に写真をお願いしたのだが、その反対側もおすすめだと言ってきて、撮っていただけた。五四広場は五四運動を記念して作られた。そのため日本人は行くべきなのか懸念していた。だが日本人だといっても誰一人嫌な顔を一つもしなかった。だがこれに関しては、私が出会った人は限られるため、嫌な顔をする人も

いるであ

ろう。  
帰国時、帰りの飛行機で私は物を落としてしまった。すると隣の中国の方がスマホのライ

トをつけてくれた。上海から羽田へのフライトで日本に行くから日本人好きは当たり前かもしれないが、とても嬉しかった。

以上が私が中国で出会った人たちの優しさの思い出である。もちろん記述した以外の人たちのエピソードがたくさんあることが中国の方々のすごさを私が感じた理由でもある。

翌日の授業は中国の日本人残留孤児の話題であった。その人たちは本当につらい経験をしていた。戦争中、戦争後に日本人は鬼と言われ自分の名前では呼んでもらえなかったそうだ。戦争は人を変えてしまう。絶対に戦争はしてはならないと、この訪中での現地の人の温もりに触れ、かつ翌日の中国の授業を受けて初めて自分から強く実感した。

今までは学校で、戦争は悪いものだと言われてきたから駄目だと思っていたが、自分自身が中国での友人も増え、その人たちと戦争がきっかけで関係が途絶えたと考えると耐えることができない。

今回の文章を見て分かるが、私は中国の方にとっても優しくしていただいた。多くの会話をした人は日本に何らかの関わりがある方たちが多かった。だが自由時間などで話したお店の人たちも、もちろん商売のためもあると思うが、とても親切にいただいた。日本のニュースには反日デモ特集などが存在するが、これは極めて限定的であり、百聞は一見に如かずとはまさにこのことだと考える。

この訪中で得ることができたつながりを途絶えさせては後悔するであろう。私はこの渡航で中国のことをより理解することができたと自負している。

## 訪中が私に与えた影響

B 班 筑波大学 藤田真愛

今回の訪中を通じて、「実際に自分の目で見て肌で感じることの大切さ」と「中国人学生のレベルの高さ」を学んだ。

今回私が訪中団に参加したのは、実際に自分の目で中国の様子を見てみたいと思ったからである。普段生活をする中で、私は中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。それは、普段のニュースなどで知る日本とその隣国の中国との関係性はあまり良いものとは言えず、中国人は日本人をよく思っていないという考えが私の中にあったからである。しかし、私自身は中国の書や茶といった歴史的な文化に興味があり、また、大学生活の中で関わる中国人留学生はみんな優しく聡明で尊敬できる人たちばかりであったので、何も知らない中国に対して、一度も訪れたことがないのに勝手に悪いイメージを持つのは良くないのではないかと思い、今回の訪中団参加に至った。

中国を訪れる前は、日本人である自分達がどのように見られるのかがとても不安であったが、中国で過ごした6日間の中で嫌な思いをすることは一度もなく、中国人の方々の優しさに触れることができた。ショッピングモールで買い物をしていて、私は中国語が話せないで英語で売り場の場所を尋ねたとき、対応してくれた方は英語を話すことができなかったが、周りの人に聞いたり、翻訳アプリを使ったりと一生懸命に対応してくれたことがとても嬉しく印象に残っている。

今回の訪中で山東省のいくつかの都市を訪問し、都市ごとに街の景観が全く異なることに非常に驚き、中国の広さを改めて実感した。また、私は中国人学生のレベルの高さに非常に驚いた。山東大学を訪れた際には、中国人学生の方が大学内の博物館を案内してくれて、展示物に関する説明をたくさんしてくれたのだが、私はその学生の方々の知識量の多さにとても驚いた。私は自分の専攻についてこんなにもしっかりと話すことができるのだろうかと考えさせられた。また、日本語専攻の学生の方々と食事会で、日本語を非常に流暢に話す姿や、実際に日本での就職を控えている人の話を聞いて、日本のことを好きな人々もたくさんいるということを感じ、とても嬉しく思った。また、その食事会の会場に向かう際、18時過ぎにも関わらず山東大学の学食に多くの学生がいたことに驚いた。日本では大学の学食は昼しかやっていないということが一般的であるので、中国人の学生は夜まで大学で勉強しているのだろうかと思った。また、食事会で話した中国人学生の方が、大学受験の大変さを話していたり、小学生も遅くまで勉強していたりたくさんの課題をこなしているという話を聞き、中国の教育のレベルの高さに驚いた。学習面で日本人は中国人と戦うことができるのだろうかと感じた。

また、青島港自動化埠頭の見学も非常に印象に残っている。訪れた際には、埠頭に並ぶコンテナの数の多さに圧倒された。自動化システムが導入されており、そのシステムが動

く様子や、その技術力の高さにも非常に驚いた。また、その自動化システムにはクリーンなエネルギーが使われているということにも非常に驚いた。日本にもたくさん輸入されている **made in China** の商品は、このような技術によって支えられているということを感じ、感動した。

訪中を通じて、自分の中国に対する考えを変えることができ、偏見を持たず、実際に体験することの大切さを学ぶことができた。また、中国人学生との交流を通じて、自分の学習への向き合い方に対する良い刺激をもらうことができた。今後社会に出て、中国人との関わる機会は絶対にあると思うし、自分も積極的に中国人の方々とも交流したいと思ったので、中国語の勉強も始めたいと思う。

今回、訪中団に参加することができて本当によかったと思った。この経験を通じて感じたことや、受けた刺激などを今後の人生に活かしていきたいと思った。素晴らしい機会をありがとうございました。

# 日中友好大学生訪中団に参加して

B班 横浜国立大学 松本 悠大

## 1. はじめに

今回、自身は、所属するゼミの先生から推薦を受け、本プログラムの存在を知り、参加するに至った。私はゼミで台湾の歴史を研究しており、日台関係や台中関係を考えていく上で中国に渡航した経験が役に立つだろうと考え、参加を決めた。

## 2. B班の一員として

今回、私は記録係として参加したが、正直至らないところばかりであった。効果的な文面を考えることも得意ではなく、またなすべきことを先延ばしにしてしまう性格が災いし、班員や同じ記録係を務めた藤田さん、前田さんや小田さんには特に多大なる迷惑をお掛けした。この場を借りて謝罪させて頂きたい。

## 3. 感想

今回、まず済南に到着し、曲阜・泰安・青島と巡った。一度の旅でここまで多くの都市をめぐったのは初めての経験であった。まず、済南で印象的なのはその寒さであった。訪れた都市で最も寒かったように思う。大明湖は非常に美しい湖で、普段の都会の喧騒を忘れることができた。ボートに乗ることができなかつたのが心残りである。山東省との交流会では、私たちの班は絵本の読み聞かせを披露した。班長やパフォーマンス係をはじめ、他の班員のサポートもあり、無事に終わり一安心であった。山東大学の学生は日本語がそこまで堪能ではなく、コミュニケーションに苦労した。私は、中国語は1ヶ月程度勉強した程度で、旅行中幾度となく言語の壁に直面した。翻訳アプリを介して意思疎通は図れるものの、やはりもどかしさを感じたので、次に中国を訪れる時までに中国語をしっかり勉強し、現地の言葉でコミュニケーションを取れるようになりたいと思った。曲阜で最も印象に残ったのは孔子廟の見学である。孔子について、歴史の授業でしか学んだことはなかったので、これを機に深く学び直したいと感じた。それでも、教科書で見た孔子の図や、朱子学の基本書などを目にし、非常に面白かった。また、ホテルの売店や街中など、至る所で孔子のグッズが売られており、まさに「孔子の街」といった雰囲気を感じた。泰安で登った泰山は非常に寒く、また険しい山道であったが、それだけに登頂した時の達成感は格別であった。青島は訪れた街の中で最も規模が大きいのと感じた。旅程の最後に訪れた青島ビール博物館は、最も印象に残った。ビールの作成過程を学ぶとともに試飲体験で出来立てのビールに舌鼓を打った。あまりの美味しさについてお土産を買い過ぎてしまったが、帰国後家で目にするたびに中国の楽しかった思い出が鮮明に蘇る。

全体として盛りだくさんのプログラムであり、それだけに疲れもあったが、非常に実りの多いものとなった。また他大学との学生とも仲を深めることができ、中国を通して日本人同士の縁が繋がったもの非常に嬉しく思う。帰国後も今回の縁を大切にしたいと強く感

じた。末筆になりますが、今回団を率いてくださった森山団長や小田さん、前田さん達友好協会の方々、現地でガイドしてくださった楊さんや馬さんや劉さんにもこの場を借りて多大なる感謝の気持ちを述べさせていただきます。本当にありがとうございました。また、特に B 班の班長の岩瀬くんには沢山迷惑をかけましたが、非常に頼りになる班長でした。その他訪中団を通して出会い、交流してくださった全ての方に感謝を述べたいと思います。

## 中国訪問を終えて

B班 神田外語大学 山下 若菜

私は子供の頃に一度中国に訪問したことがある。しかし当時の思い出といえばお手洗いの使用方法についてと市場の雑踏、朝の広場ダンスを目にした衝撃のみだ。どれも夢のような、映画のワンシーンのような遠い記憶である。しかし今回の訪中では、そうした自分と切り離されたものではなく、自分の身に染みて色々な経験ができた。その中でも特に印象的だった二つの出来事について記したい。

一つ目は三日目に訪れた泰山だ。山頂からの景色は壮観で、晴れ渡る空の青と、遠くに連なる山々の深い緑のコントラストがとても美しかった。山頂に程近い場所までバスで移動したので、山頂までは階段を少し登った程度だったが、あまりに雄大な光景にまるで自分が時間をかけて遥々ここまで登ってきたかのような錯覚を覚えてしまった。今まで見た景色の中でも指折りのもので、この先も忘れないだろう。登る道中で道に広がり写真撮影をしていた際に、こちらに向かって大きな声で怒鳴り続けていた男性がいたことにも驚いた。

泰山に関してはもう一つ印象的な出来事がある。泰山にまつわる石敢當は、かつて沖縄土産として両親が買ってきてくれたものだった。それから私の部屋に置いてあるが、泰山にまつわるものとは知らなかったのが驚き、お土産として持ち帰りたと思った。実際に山では至る所に露店があり、石のお土産が売られていた。頂上から集合場所に帰る際に、適当に選んだ店で石敢當のストラップを選び、会計をしようとした時のことだ。それまで使用できていた電子マネーが突然エラーを起こし、会計ができなくなってしまった。何度試しても会計はできず、そのうちに怒鳴っていた男性のことを思い出し、ここでダラダラと手間取っている自分もまた怒られるのではないかと怖くなった。しかし店主のおじいさんは優しく、私が電子マネーではなく現金で会計していいかというまで黙って見守ってくれた上に、現金での支払いにも優しく応じてくれた。彼の対応に感謝すると共に、人を大きな括りで判断せずに個人を見ることの重要性を感じた。

二つ目は青島ビール博物館での出来事である。レジに並んでいた時のことだ。目の前で団員と客が揉めている光景を目にした。あとで話を聞いたところ、その団員が会計をしようとしたところにその客が自分は急いでいるから先に会計させろ、と割って入ってきたらしい。団員がそれに抗議しても客は横入りをやめず、店員も特に対処しようとしなかった。横からバスのガイドが団員に挑戦したが、最終的に団員が言うことを聞かずにレジに身を乗り出す客を押し退けると、ガイドは笑顔で「よくやった！」といい彼を褒め称えたそうだ。私は一連の流れを知り、中国で自分の意見や要望を表明することの大切さを痛感し

た。日本で同じような振る舞いをして、褒められることはないだろう。察することを美德としがちな日本人には難しい、主張することを重んじる文化が中国には根付いているのだと感じた。

思いがけない学びも得ることができた。訪問団として参加した日本人の学生たちとの交流である。私はこれまで学外のプログラムに参加したことがなく、こういった他校の学生と交流するのは初めてのことだった。バスの中、ホテルの部屋、食事の際などの雑談から、自分では想像もつかないような話を聞くことができ、大学で自分の興味のあることを突き詰めている人、様々な体験をしようと奮闘している人の姿に多くの刺激を受けた。私も残りの大学生活をただ怠惰に過ごすのではなく、勉強なり新しい経験なりとにかく有意義に過ごすように自由な時間を使おうと思う。

訪中前は現在の中国と日本の都市部のありようについて、水回りなどには細かな違いがあれど街の有り様や人の営みにそれほどの違いはないだろうと考えていた。けれども山での怒号や飛行場で見かけたいざこざ、青島ビール博物館での出来度とから、中国と日本の所変われば品変わる、といった文化の違いを知ることができた。それだけではない。泰山では会計時に優しくおじいさんがいて、スーパーでは量り売りを前に戸惑う私たちに、ジェスチャーで親切に接客をしてくれた店員がいた。訪問先の大学生は拙い私の中国語に耳を傾け、一緒に会話を楽しんでくれた。

こうした経験から、相手を知るためにはその背景を知ろうとすること、そして背景とは別に、その相手個人について知る事の両面が大事だとわかった。日本と中国の関係に関しても同じことが言えるのではないだろうか。背景と個人を理解し合うことで交流が生まれ、個人のつながりが大きなつながりへと結びつくことを期待したい。

## 自分で見ることの重要性

B 班 高知大学 山本 拓斗

まず、訪中前の中国のイメージは、正直良いものではありませんでした。むしろ、マイナスなイメージがほとんどだった。中国を知る情報源はニュースかインターネットでした。ここでは、反日感情や戦争時の名残からの反日運動や、日本だけでなく世界の観光地での中国人観光客たちのマナーの悪さをたびたび見ていた。また、COVID-19 への対応や、黄砂や PM2.9 などによる環境汚染問題などから、私の中では否定的な側面ばかり気になり、中国への否定的なイメージばかりがあった。しかしながら、否定的なイメージばかりだったものの、訪中団に興味を持ち、参加したのは「百聞は一見に如かず」という言葉があるようにメディアからの情報で得た知識ではなく、実際に自分の目で“中国”を知りたいと思えたからだ。現代は科学技術の発展により、国、地域、時間関係なく、自分のしりたい事を調べられ知れますし、何が起きているかも知ることが容易になった。私が大学で学んだ「実際に自分でやる」というものから、実際に自分の目で、自分自身で経験をしてみたいと考え、参加した。

次に、訪中してみたのイメージは、やや良い印象へと変わった。今回の訪中で山東大学、曲阜師範大学のほか、山東省各地でのプログラムがありましたが、マスメディアでみるような反日運動や日本人を毛嫌いしているような人はおらず、むしろ日本の文化などを尊重してくれていて親日家まではいかずとも日本や日本人に良い印象を抱いている人のほうが多いと感じた。マスメディアでみる反日運動や反日の人々は氷山の一角に過ぎないということに改めて再認識させられた。また、私は中国語ができずコミュニケーションをとることへの不安がありましたが、一部の人は英語が通じ、中国語しかわからない人でも、こちらが携帯などでの翻訳に協力的であり国や文化が異なっていたとしても、人の思いやりの根本にあるものに差異はないのでと考えた。そして、環境汚染についてのイメージも少し好転した。今回のプログラムでは、青島港の自動化埠頭やハイセンスグループ本社の見学をした。中国には経済発展区がありますし、環境汚染についてのニュースも長年見ていることから環境問題に関することは、そこまで重要視されていないと思っていた。しかし、青島港の自動化機械のエネルギーは水素動力採用で二酸化炭素の排出 2 万 T 削減を実現していることから環境問題の改善に関しても力を入れて取り込んでいることが分かった。しかしながら、マイナスなイメージのままの面もあった。それは生活環境に関することだ。訪中前から、大気の汚染状態は心配な部分があったが、実際に大気の汚染具合は日本とは比べ物にならないぐらいにひどく、常に霧がかかっているように視界の悪い地域もあった。

最後に訪中を終えて、自分で経験をする大切さや学ぼうとする姿勢の大切さを学びました。マスメディアからの情報でのイメージ通りの事や全く違う事があり、マスメディアの

情報は多大な情報の中のほんの一部に過ぎず、実際に自分で体験し見聞きすることで自分にとって納得のいく結論をつけることができ、偏見の目を無くしていけると考えた。今回の訪中を通して、中国の文化・魅力に気づくところできた。より多くの人に本当の中国とマスメディアで見る中国の違いをしってもらいたいと考えた。そのため、今回の経験を将来にいかしていきたいと思った。

今回の訪中で新たな視点などを手に入れることができました。本当にありがとうございました。

# 中国に訪れて感じた事

B班 山梨県立大学 依田 香穂

## ●交通

中国に着いて最初に驚いたのは、交通の複雑さについてだった。まず、クラクションの多さが日本とは比べものにならない程であり、まるでクラクションでコミュニケーションをとっている様だった。そして原動機付自転車も、赤信号の交差点で横五列程に広がって並んだり、自転車と同じレーンで並走していたが、危うい状況になっている所を結局は一度も見事な事はなかった。その他にも観光地近くの旧市街地では、多数の歩行者がいる所を三輪車はその隙間を縫う様に走っており、14億人もの人間がいる国の強さと活気を思い知った。

この光景から私は「中国人は生き生きとしているが、日本人は動く死体の様だな。」と思ったが、その事を中国人の友人に伝えた所、「我在日本觉得你们好有活力，我们就像是尸体一样」と日本で私と全く逆の事を感じたと話していた。外国で人が生活する様子を見ると、誰しもが自国の様子と比べてしまうのかもしれない。

## ●料理

私が中国で食事をした時に感じたのは、油っぽい・辛い・味が濃い、という事だった。山椒やクミンを効かせた肉の味に驚き、火鍋の真っ赤なスープを一舐めして悶絶した。洋食であるトマトスパゲティも、中国では油がたっぷり使われており、中国人は胃腸が日本人よりもずっと強いのだと感じた。そこで、以前訪日団に参加した事のある山東省出身の友人に、日本の食事について尋ねた所、「味が薄すぎて喉を通らなかった。」と答えた。

私は日本の食事はとても美味しく、それは海外の人も当然美味しく感じるだろうと考えていたが、今回の経験から「美味しい」の基準は国ごとに大きく異なる事が分かった。テレビでは外国人が日本料理を食べて「美味しい」と言っている場面が多く放送されているが、必ずしも全員がそうではない事を念頭に置いてから、テレビを見るのが良いと思う。

## ●対話

私は大学で第二言語に中国語を選び、中国語検定3級を取ったため、中国ではなるべく中国語を使おうと考えていた。しかし実際に会話しようとするとう極簡単な単語しか話せず、少しでも難しい話をしようとするとう発音が通じなかった。そのため翻訳機や簡単な英語を使っていたのだが、最終的にはボディランゲージが一番通じる事に気付いた。

例えば飛行機に乗っている時、隣の席の入国カードを持った中国人のお爺さんに「～～筆？」と聞かれたため、自分の持っているペンを少し持ち上げ、「これ？」という顔を相手に見せた所、お爺さんが手のひらを出して、無事にペンを貸す事が出来た。中国で中国語を使おうとする事は勿論重要だが、その場の状況と顔と仕草で大体の人は言葉を使わずコミュニケーションを交わす事が出来るのだという事も覚えておいて良いと思う。

## ●学んだ事

テレビのニュースや新聞では日本と中国の関係について、連日様々な報道がされているが、実際には中国の人々は熱心にその事について関わっている訳では無く、自分の生活のために毎日必死に働いているというのが、私が今回訪中団に参加して学んだ事だ。ネットを見ていると中国人を敵視している人が散見されるが、それはカメラを通しての映像や記事上の文字、同じネット上にいる特定の人にそう感じているのであり、実際に中国で人々と顔を突き合わせて好き勝手言えるのかというと、それは全く出来ないのではないかと思う。それは、その人達は我々と同じく自分の生活を第一として毎日を過ごしており、外国の人々を中傷する事に情熱を燃やしている訳ではないからだ。嬉しい事があったら喜び、悲しい事があったら涙を流す。相手は価値観の異なる異星人などでは決してなく、どこまでいっても同じ人間である。私達は報道を見て全てを決めつけてしまいがちだが、その先には生身の人間がいるという事を忘れてはならない。